

あと一度 何度でも

作
鈴木
浩太郎

登場人物

柑菜

補佐一

補佐二

司

暗闇に柑菜の姿が朧げに浮かぶ。

柑菜

現実が夢を追い抜いて、鼻歌すらやめてしまったわたしは彼女の手を離しました。それでも彼女は夢の形を変えただけだったようです。そのことを知ったのは、わたしがバナナの皮を踏んだ後のことでした。彼女が夢の形を変えなければ、彼女があそこに立っていることはなかった。でも、彼女が夢の形を変えなければ、わたしはバナナの皮に感謝していたと思います。…いえ、今でも感謝しています。だって、バナナの皮が彼女とわたしをもう一度引き合わせてくれたのですから。ビバ・バナナ。

暗転。

次に光が入ると、そこには作業室のような空間が広がる。

机や様々な機材が所狭しと並んでいる。

そこかしこに箱が置かれ、中には積み上げられたものもある。

中央で険しい顔でリストを手仁王立ちする司。

補佐一は、その周りを忙しく行き来しながら、

箱から小さなケースを取り出して秤に載せては目を司に伝え、別の箱にしまっていく。

司は、補佐一の報告をリストでチェックしていく。
補佐二は、その様子を見て補佐一に無邪気に付きまとう。

司 千九百八十六番。

補佐一 千九百八十六番、二十四グラム、ラブラドルレトリバー。

司 二十四グラム、ラブラドルレトリバー。千九百八十七番。

補佐一 千九百八十七番、二十グラム、人間。

司 二十グラム、人間。二千五番。

補佐一 二千五番、十六グラム、クスノキ。

司 十六グラム、クスノキ。二千七番。

補佐二 ねー、あたしもませてー。

補佐一 二千七番、八グラム、雲。

補佐二 ねー。

司 八グラム、雲。二千八番。

補佐二 なんだっけ、これ？

補佐一 触らないでよ。

司 今は忙しい。おとなしくしていなさい。

補佐二 おとなしくだって。

補佐一 言われたのはあんたよ。

司 仕事に集中しろ。二千八番。

補佐一 二千八番、二十二グラム、鰯。

補佐二 いわし？

司 二十二グラム、鰯。二千十一番。

補佐二 あたしもいわしになるよ。

補佐一 二千十六番——

司 二千十一番だ、馬鹿者。

補佐二 ねえ、あたしもいわしだよ。

補佐一 静かにしててよ。聞こえないじゃない。

補佐二 あー、おこったー。

司 続ける。

補佐一 ですが…。

司 すべてを水の泡にするつもりか。

補佐二 やーい、おこられたー。やーい、やーい。

補佐一 もう頃合いです。いつまで置いておくつもりですか。

司 間もなくだ。いいから次だ。

と、柑菜がふらふらと現れる。

補佐二 だけが気がつき、ぎよっとする。

司 二千十一番。

補佐一 二千十一番、六グラム、ウーパールーパー。
司 六グラム、ウーパールーパー。二千十二番。
補佐一 二千十二番、十九グラム、アドレナリン。
司 十九グラム、アドレナリン。二千十五番。

柑菜、それと気づかず秤に載る。
補佐一、次のケースを秤に載せる。

補佐一 二千十五番、五万五千グラム。

司 五万五千グラム。

補佐一 五万五千グラム。

柑菜 ここはどこですか。

補佐一 誰だ、おまえ。

柑菜 誰でしたっけ、わたし。

司、ため息混じりにリストを置く。

司 また紛れ込んだのか。

柑菜 教えてください。ここはどこですか。

司 他の司には会わなかったのか。

柑菜 質問しているのは、わたしです。

司 どこまで憶えている。最後の記憶はどこで途切れた。
柑菜 (司に詰め寄りながら) だからここはどこなんですか。

補佐一、柑菜を羽交い絞めにする。

柑菜、振り解こうと暴れる。

補佐二、物陰に隠れ、こっそり様子を窺う。

柑菜 離して。うちに帰してよ。

司 混乱しているな。

補佐一 この重さ、まだ生きてるんじゃないですか。

司 ここを知ったからには帰すわけにはいかん。

柑菜 わたしをどうするつもり？

司 私の手となり、その邪魔な記憶を消してもらおう。

柑菜 いやっ！

柑菜、補佐一の手を振り払う。

と、補佐一と目が合い、はっとする。

柑菜 アリア？

補佐一 は？

柑菜 アリアでしょ？わたしよ、わたし：そう、柑菜。

司 おまえたち、知り合いなのか。

補佐一 わたしは知りません。

柑菜 知らないわけじゃない。あんなによく歌ったのに。

司、帳簿を取り出し、確認し始める。

補佐一 あなた、誰かと勘違いしてるんじゃないの？

柑菜 するはずない。だってアリアは…。

柑菜、息を呑み、後退りする。

司 残念ながら、彼女はアリアと言う名ではなかった。

司、帳簿を閉じ、しまう。

司 おまえは死んだのだ。

柑菜 違う。死んだのは、アリアよ。

司 その者の生き死にに興味はない。いま伝えているのは、お

柑菜　まえの事実だ。おまえは死んだのだ。

司　わたしは死んでない。

柑菜　ならばおまえはなぜここにいる。

司　知りません。ここは、どこなんですか。

柑菜　ここは、死んで現世を離れた魂を転生させる機関だ。

補佐一　ふざけないで！

柑菜　すぐには受け入れられないと思うけど…。

司　死ぬまで受け入れられないわよ！

柑菜　では、もう問題ないな。

司　なんなの、ここ。そういう団体なの？

柑菜　我々三十九班の任は魂を測量し、その重さに応じて転生先

を決定することにある。

柑菜　付き合いきれない。わたし、帰ります。

柑菜、歩き出す。

補佐一、すかさず柑菜を止める。

柑菜　（補佐一の手を跳ね除け）やめてよ。

補佐一　きちんと説明するから。ね。

柑菜、改めて補佐一の顔を凝視する。

補佐一 司、どうぞご報告に。

司 そうさせてもらおう。しっかり仕込んでおけ。

補佐一 はい。

司、立ち去る。

補佐一 いきなりで驚いたよね。

柑菜 本当によく似てる…。

補佐一 アリアに？

柑菜 そう。まるで生き返ったみたい。

補佐一 あなたが死んだから、会えたのかもしれないよ。

柑菜 まさか…。

補佐一 ボーカルカンナの相方、ギターのアリア。

柑菜 ……。

補佐一 バンド名は、よつこらショータイム。

柑菜 うそでしょ…。

補佐一、周囲を窺う。

補佐一　なんか思い出してきた。わたしの名前は、横内美緒。「カンナ」に合わせて、バンドの時はアリアを名乗ってた。
柑菜　アリア……！

柑菜、補佐一に抱き付く。
補佐一も柑菜を強く抱き締める。

補佐一　ひさしぶり。
柑菜　会いたかった。
補佐一　わたしも。
柑菜　今までどこに行ってたのよ。
補佐一　ここ。
柑菜　死んだとばかり思ってたんだよ。
補佐一　死んだよ。
柑菜　元気だった？
補佐一　死んだけどね。
柑菜　もう、さつきからやめてよ。
補佐一　だって本当なんだもん。
柑菜　じゃあ、どうしてこうやって話してられるのよ。
補佐一　それは、カンナが死にかけてるから。

柑菜
補佐一 アリア、洗脳でもされたの？
柑菜 よく思い出して。ここに来る直前のことを。
補佐一 ここに来る直前？
柑菜 ほら。
補佐一 確か…そうだ、仕事帰りだ。
柑菜 仕事帰り？
補佐一 うん。
柑菜 カンナ、卒業したんだ。
補佐一 え？あー…うん。
柑菜 ごめん。続けて。
補佐一 で、商店街を歩いていて…。
柑菜 誰かに襲われた？
補佐一 ううん、踏んだ。
柑菜 踏んだ？
補佐一 踏んだ。バナナの皮。
柑菜 あー…。
補佐一 転んで、頭打って、意識なくして、それで…。
柑菜 気がついたらここに来ていた。
補佐一 そう。
柑菜 ベタだねえ。古いねえ。

柑菜 本当だ……。わたし、死んだんだ……。

補佐一 大丈夫。カンナは、まだ死んでない。

柑菜 え？

補佐一 死んだ割には魂が重いもん。たぶん仮死状態なんだよ。

柑菜 ごめん、言ってる意味がわかんない。

補佐一 カンナはまだ帰れるってこと。

補佐一、柑菜の手を握る。

補佐一 現世に帰れる抜け道があるの。案内するよ。

補佐一、柑菜の手を引いて走り出す。

と、補佐二、呆けた様子で物陰から姿を現す。

補佐二 どこに行くの？

補佐一、ぎくりと足を止める。

補佐二 その人、どこかに連れていくの？

補佐一 新人だし、職場見学でもしてもらおうかなと思って。

補佐二 帰るって言ってたよ。げんせ？

補佐一 それは…。

補佐二 ヨコウチミオ…。

補佐一 え…。

補佐二 そう、ヨコウチミオ。確かそう言ってた。

補佐一 あのさ、よかったら、一緒に仕事教えない？

補佐二 それにドッコイショータイム。

補佐一 よっころショータイムね。

補佐二 あなたに教えたのは、あたしだった。

補佐一 ねえ…。

補佐二 司に相談しなきゃ。

補佐一 待って。

補佐二、足早に立ち去る。

補佐一 まずいな。あいつも記憶を取り戻し始めた。

柑菜 記憶？

補佐一 行こう。急がないと司が戻ってくる。

補佐一、再び柑菜の手を引き、走り出す。

が、程なくして柑菜は踏みとどまる。

補佐一 どうしたの？

柑菜 ありがとう、アリア。でも、わたし、帰れなくていいよ。

補佐一 はあ¹³

柑菜 思い出したの。最近いろいろと行き詰っててさ。

補佐一 いや、行き詰まることなんて、誰でもあるから。

柑菜 思いがけず死ぬことができ、ラッキーかなって。

補佐一 カンナ、それは駄目だよ。

柑菜 いいの。

補佐一 このままだとバナナの皮に殺されたことになるんだよ。

柑菜 いいよ。わたし、バナナ好きだし。

補佐一 カンナ…。

柑菜 死んだら、ここで働けばいいんですよ。

補佐一、肩を落とし、リストを取り秤の前へ。

補佐一 戻る肉体が無いのに現世に未練がある魂だけはね。

補佐一、秤からケースを取り出して秤に載せ、

目をリストと照らし合わせてチェック、ケースが何本か溜まってからまとめて箱に入れる作業を繰り返す。
柑菜は、その作業を少し距離を置いて眺める。

柑菜 未練がない魂は？

補佐一 生まれ変わる。それか跡形もなく消滅する。

柑菜 え…。

補佐一 魂はね、草や石、空気、どんなものにも宿ってるの。魂の重さは現世での一生の間に膨らんだり萎んだりする。寿命が尽きた時点で極端に大きかったり小さかったりする魂は、転生には向かないから消されることもあるの。

柑菜 ふーん…。

補佐一 現世での記憶は、現世を離れると長くは持たない。普通は亡くなった瞬間に消える。でも、未練があると記憶の風化は遅くなる。そして、記憶にも重さがある。これがどういうことか、わかる？

柑菜 いや、よく…。

補佐一 未練がある魂は、消される可能性が高いってこと。

柑菜 ……。

補佐一 わたしみたいに生前の姿を留めた魂は、それだけ未練が強

い証拠なんだけど、ま、ダイエットの余地があったから、司の仕事を手伝いながら記憶の風化を待つてゐるわけ。

補佐一、ケースのひとつを持ち、軽く振る。

補佐一 あと少しすれば、わたしもここに収まんのよ。

柑菜、手近にあるケースを持ち上げる。

柑菜 この中に魂が…。

補佐一 だーっ！

補佐一、ケースを置き、柑菜が持つケースをひったくる。

補佐一 気安く触らないでよ。壊したら大変なんだから。

柑菜 ごめん。

補佐一、ケースを元の位置に戻す。

補佐一 カンナは生きてるだけにめちやくちや重いから、見込みな

しで消されるかもね。

柑菜

生きてる時の記憶が無くなるなら、同じじゃない？

補佐一

同じじゃないよ。転生し続けることができたなら、いつかまた人として夢を見ることができるとも思えないじゃない。

補佐一、作業を再開する。

柑菜、補佐一に歩み寄る。

柑菜

アリア、未練があつたんだね。

補佐一

当たり前でしょ。こんな若いうちに死んだんだから。

柑菜

やりたいこととかあつた？

補佐一

腐るほどね。教員試験だつてやつとの思いで通つたのに。

柑菜

そうなの？すごいじゃん！

補佐一

死んだら元も子もないけどね。

柑菜

もしかして、音楽？

補佐一

そう。

柑菜

えー、すごい。小学校？中学？

補佐一

中学。

柑菜

どこ、どこ？どこの？

補佐一

(作業を投げ出し)もう、思い出させないでよ。どんどん

リバウンドするじゃん。

ごめん…。

あなたが来なければ、なにもかもきれいさっぱり忘れて、来月にでもイソフラボンになることができたのに。

イソフラボン？アリアの来世、イソフラボン？

なによ。みんなの健康を守るじゃない。

いや、別に文句があるわけじゃ…。

なのに思い出しちゃったじゃない。横内美緒に戻っちゃったじゃない。

わたしは戻ってくれて嬉しいよ。わたし、ずっとアリアに謝りたかったから。

…。

ごめんね、いっしょに夢を見ることができなくて。でも、よかった。アリアはちゃんと夢を掴んだんだね。

だからもう死んでるんだって。

それでもさ。わたし、ずっと後悔してたの。なんであんな終わらせ方をしちゃったんだろうって。

そんなこと言ったら、わたしもさ、カンナの気持ちを考えないで、夢ばかり押し付けてたかな…って。

わたしが臆病だったただだよ。

柑菜

補佐一

柑菜

補佐一

柑菜

補佐一

柑菜

補佐一

柑菜

補佐一

柑菜

補佐一

柑菜

補佐一

柑菜

補佐一

柑菜

補佐一 まあ、それもあるけどね。でも、そのおかげで、わたしは

違う夢を見ることができたわけだし。

柑菜 羨ましいよ。わたしは、結局なにもなれなかったから。

補佐一 いま、どうしてるの？

柑菜 普通にOL。

補佐一 いいじゃん。就職できたんじゃない。

柑菜 できたけどさ、仕事も気持ちも空回りしてばっかで。

補佐一 カンナのことだから、また結論急いでるんじゃないの？

柑菜 かもね。

補佐一 歌はもう歌ってないの？

柑菜 全然。

補佐一 そう…。

柑菜 懐かしいね。馬鹿みたいにライブやったよね。

補佐一 ね。よく単位落としそうになってさ。

柑菜 そう、そう、そう。

補佐一 本気でメジャーデビュー目指してたもんな。

柑菜 よつこらショータイムだね。

補佐一 なんでよ。いい名前じゃん。

柑菜 毎日が刺激で溢れていて、すごく輝いて見えてた。

補佐一 今は違う？

柑菜 百八十度ね。なにもかもが灰色に映ってるよ。

補佐二が現れ、柑菜たちから離れたところに立つ。
柑菜たちは、補佐二にまったく気がつかない。

補佐一 今だけじゃん？どうせ入ってまだ間もないんでしょ？
柑菜 そうだけど、そういうことじゃないの。来る日も来る日も働いて帰って寝て、働いて帰って寝て、たまにある休みは疲れて身動きが取れなくて……。わたしの人生、こんな退屈な無限ループだけで終わってくのかなって考えたら、なんだかやるせなくなってる。

補佐一 嫌なら変えればいいじゃん。
柑菜 そんな時間、つくれるのは学生のうちだけだよ。

補佐一 カンナ、そんなことで帰りたくないなんて言ったの？

柑菜 アリアには、わかんないよ。凡人にしかねない人間の気持ちなんて。わたし、もうなにも考えたくない。

補佐二 だったら、わたしに譲ってよ。

柑菜と補佐一、ぎよっとして振り返る。

補佐二

わたし、あつちでどうしてもやらなきゃいけないことがあるの。(柑菜に詰め寄りながら) だから、あなたの身体、わたしに譲って。

補佐一

(柑菜を庇い) あなた、まさか…。

補佐二

そう、思い出せたの、なにもかも。だから司に話すのはやめた。だってバレたら、わたしもあなたも消されちゃうもの。もうすぐ司が戻ってくる。お互いなにもなかった振りを見ましよう。隙を見てわたしが現世に向かうから。いいよね、カンナちゃん。

補佐一

駄目だよ、カンナ。戻るのは、カンナだ。

補佐二

決めるのは、カンナちゃんだよ。

柑菜

いいですよ。お譲りします。

補佐一

カンナ^三

補佐二、両手を伸ばし、歓喜の声をあげる。

補佐一

カンナ、自分がなにを言ったか、わかっているの？

柑菜

わかっているよ。

補佐一

わかってない。カンナは、わかってない。死ぬってことがどういうことなのか。

補佐二 (補佐一の肩を掴み) 本人が決めたことよ。他人がぎやあぎやあ騒がないでちょうだい。

補佐一 (補佐二を突き飛ばし) 悲しむ人がいるんだよ？カンナが死んだら悲しませる人がいるんだよ？

補佐二 大丈夫よ、わたしがちゃんとカンナちゃんを演じてあげるから。

補佐一 カンナが死んだら悲しむ人を騙すつもり？
別に悲しむ人なんて…。

柑菜 わたしは悲しい。
…。

補佐二 耳を貸すことないよ。自分の気持ちに正直に。
生きてればなんでもできる。何度でもやり直せるじゃん。

柑菜 無理だよ。もう子供じゃないんだから。
どうして大人になるまでに決めきろうとするの？

補佐一 ……。
どんな魂も死ぬまで生きられるんだよ？

補佐二、歯嚙みをしながら箱を漁り、
一本のケースを取り出し、前に突き出す。

補佐二　ごちゃごちゃうるさいんだよ、ヨコウチミオ。これはあんなのケースだ。壊されなくなかったら、そいつの判断に従いな。

柑菜　ちよっと、それを壊したら…。

補佐二　そうだよ、ヨコウチミオは転生できなくなる。

補佐一、柑菜の手を握りしめる。

補佐一　わたしのことはいいから。帰るよ、カンナ。

補佐二　待ちなさいよ。壊されてもいいの？

補佐一　どうせここまでリバウンドしちゃったしね。

柑菜　アリア…。

補佐一　いいの。アリアはもう死んでるんだから。

補佐二、ケースを持つ手を振り上げる。

柑菜　（駆け出し）駄目！

と、司が飛び込んでくる。

司　　なにを騒いでいる。

柑菜、立ち止まる。

補佐二、凍りつき、やがて手をそろそろと下ろす。

司、補佐二からケースを奪い取り、確認する。

司　おまえ、なぜこれを？

補佐二　いえ…。ただ仕事の手伝いをしていただけです…。

司　その口振り…。おまえ、思い出したな？

補佐二　いえ、なにも。なにも思い出してません。

司　（補佐二の腕を掴み）来い。

補佐二　（もがきながら）待ってください。この二人、やはり知り合いました。こいつ、本当の名前はヨコウチミオです。

司　ヨコウチミオ…。聞き覚えがあるな。

補佐一　はい、私の名前です。

司　では、おまえも思い出したのか。

補佐一　はい。彼女はわたしの親友です。わたしはこれから彼女を

現世に送り届けます。

司　なんだと？

補佐一　彼女はまだ生きています。魂です。

司 勝手な真似は許さんぞ。

補佐一 そいつは彼女が生きていることを利用して、彼女の身体を奪おうと画策しました。

司 なに？

補佐二 嘘です。そんなこと、してません。

柑菜 しました。そのアリアのケースを盾にして。

補佐二 おまえ…。

司 どうやら詳しく話を聴かせてもらう必要があるようだな。

補佐二、司の手を振り払い、走り去る。

司 待て！（向き直り）お前たち、動くなよ。

司、補佐二を追って走り去る。

補佐一 さ、帰るよ。

柑菜 でも…。

補佐一 まだなんか引つかかっているの？

柑菜 わたしのせいで、アリアが生まれ変われなくなっちゃう。

補佐一 生まれ変わるよ。司、ああ見えて優しいんだ。

柑菜 本當に？

補佐一 うん。あと少ししたらイソフラボンになるから、大豆、わ

たしだと思つていっぱい食べてよ。

柑菜 なんか気持ち悪いな。

補佐一 カンナの中でカンナをいっぱい支えてあげるから。

柑菜 うん。わかつた。

補佐一 だからもう踏むなよ。バナナの皮。

柑菜 うん。

補佐一 次踏んでも、わたしはここにいないからね。

柑菜 うん。

補佐一 生きて、カンナ。死ぬまで目一杯。

柑菜 うん。

暗転。

しばらくして、暗闇に柑菜が一人、朧げに浮かび上がる。

柑菜

あれは夢だったのでしようか。わたしは後遺症もなく無事に回復して、今でも同じ仕事を続けています。あの日踏んだバナナの皮は命を繋いでくれましたが、退屈な日常を変えてはくれませんでした。けれど、今では豆乳を飲みな

がら鼻歌を歌うのが日課です。ビバ・大豆。ビバ・イソフ
ラボン。アリアが今日もわたしの中を巡ってる。

柑菜、緩やかに暗闇の中へ溶けていく。

— 幕 —